

心の栄養剤No163 「旅立ちの春～別れの春そして感謝の春」

「無償の愛」

米国の作家・シェル・シルヴァスタインが書いたこの物語をご存知でしょうか？それは一人の男が子供から老人になるまでの間、リンゴの木との交流を描いた絵本です。内容は次のようなものです。

一本のリンゴの木が、少年のための遊び場になります。少年は木に登ったり、枝にぶら下がったり、リンゴの実を食べたりします。疲れたときには木陰で昼寝をしました。少年は木が好きで、木も嬉しく思っていました。時は流れて、少年は遊びに来なくなります。

ところが、ある日、成長した少年が木の前に現れます。木は以前のように遊ぶことを勧めますが、少年は、もうそんなことはできないと答えます。それよりも買い物したいので、「お金がほしい」と言います。木はお金を持っていないから、「私のリンゴをもぎとって、まちで売ったらどうだろう」と提案します。少年はリンゴの実すべて持っていきます。木はそれで嬉しかったのです。また、長い間、木は一人でした。

ある日、現れた少年はもう大人になっていました。以前のように遊ぶことを勧める木ですが男は「ぼくに家をくれるかい」と言います。木は「私の枝を切り、家をたてることはできるはず」と言います。男は枝をすべてきって持ち去ります。それでも木は嬉しく思います。また長い間木は一人です。

再び、年をとった男が現れて、木に向かって「どこか遠くへゆきたい、お前、船をくれるかい」と言います。木は「私の幹を切り倒して、船をお作り」と言います。そして男は幹を切り倒して船を作って行ってしまいました。

長い年月が経ち、男は木のところに帰ってきました。切り株になってしまった木は何もあげられないことを謝ります。男は「わしは今たいして欲しい物はない。座って休む静かな場所がありさえすれば。わしはもう疲れ果てた」と言います。木は「この古ぼけた切り株が、腰掛けて休むのに一番いい・・・。腰かけて、休みなさい」と語り掛けます。男はその言葉に従って切り株の上に腰掛けます。木は嬉しかったと言い、物語はそこで終わります。



30年以上、薬店の仕事を通じて多くのお客様と接してきて気づけたのですが・・・
両親に～夫に～妻に～子供に～友人に、そして各地で悲惨な災害が起こって苦しめられてる顔知らぬ人に対して、当たり前のように自分の体調～生活～暮らしは、二の次にしてでも心配し、自然に無償の愛をそそぐ事が出来る方がいらっやいます。

そんな方々は、決まってとても幸福に幸せそうに輝いて見えます。私も「無償の愛」を残された人生の一つのテーマ・目標にしたいと思います！！

「気にするなよ、おやじ」

三月は卒業式のシーズンである。卒業式といえば、私には忘れられない父との思い出がある。私の大学の卒業式に出席するため、それまで天草をほとんど離なれたことのなかった田舎者の父が、一人で博多までやってきたのである。私は驚いた。父は下宿の私の部屋に泊まった。

卒業式の朝、父は大学の門の前で立ち止まり、じっと、門を見つめたまま、しばらく動こうとはしなかった。学部ごとの謝恩会の席で、父と私は一箱の折り詰め弁当を分け合って食べた。そして、一合ビンの日本酒を、交互につぎ合って飲んだ。父は実に嬉しそうであった。私はその時の父の嬉しそうな顔を、今でも忘れることができない。

卒業式のあとで、私達は親友二人と共に、大濠公園に行った。親友達とも、その日でお別れであった。私は公園のベンチに座って、その親友達との別れを惜しんだのであった。父は少し離れてなぜか寂しそうに、私達を眺めていた。

翌日、父は黙って天草に帰って行った。しかし、その時の父のなぜか寂しそうな姿が、長い間ずっと、私の心の中から離れなかった。

その父が四年前に亡くなった。亡くなる一年ほど前に、入院して寝たきりになった父が、ベッドの中で、私の手をしっかりと握って言ったのである。

「お前の卒業式の日あの公園での悔しさは、今でも忘れん。金がなくて皆にジュースを買って、飲ませることもできんかった。本当にすまんかったな。おれは悔しくて、帰りの汽車の中で、涙が止まらんかった」

父は三十数年もの間、その時のことを、悔やみ続けていたのである。私はその時、八十八歳の父の心の風景をはっきりと見た。そして、卒業式の日の大濠公園での、あの父の寂しそうな姿を、三十六年たって、初めて理解できたのであった。私は仏壇にかざった父の写真を、しみじみと見ながら

「気にするなよ、おやじ」

とあらためて呼びかけている。



その人は一切の見返りも求めておられないのですが、知らない内に実は～「感謝」「ありがとう」という最高の財産をいっぱい～いっぱいもらえ～自分の人生が輝き充実していきます。

ある本に「ありがとう」をいっぱい言われる人は、成功し「ありがとう」をいっぱい言う人は幸せになると書いてありましたが、たぶん真実だと思います！

最期に、私の大好きな尊敬する吉田松陰先生が、両親に宛てた辞世の句(30歳で自刃)を紹介させて下さい！！

「親思う心にまさる親心 今日のおとずれ何とときくらん」

頑張っ、顔晴って素晴らしい春を迎え過ごしましょう！！

